

世之助の話

芥川龍之介

青空文庫

上

友だち 処でね、一つ承りたい事があるんだが。

よのすけ 世之助 何だい。馬鹿に改まつて。

友だち それがさ。今日はふだんとちがつて、君が近きん々きんに伊豆の何とか云ふ港から船を出して、女護にょごヶ島しまへ渡らうと云ふ、その名残りの酒宴だらう。

世之助 さうさ。

友だち だから、こんな事を云ひ出すのは、何だか一座の興を殺そぐやうな気がして、太夫たいふの手前も、聊いささ恐縮かなんだがね。

世之助 そんならよせばいいぢやないか。

友だち 処が、よせないね。よせる位なら、始から云ひ出しはしない。

世之助 ぢや話すさ。

友だち それがさ、さう中々簡単には行かない訳がある。

世之助 何故？

友だち 尋きく方も、尋かれる方も、あんまり難ありがたい事ぢやないからね。尤も君が愈いよいよいと云へば、私も度胸を据もつとゑて、承る事にするが。

世之助 何だい、一体。

友だち まあさ、君は何だと思ふ。

世之助 ぢれつたい男だな。何だつて云へば。

友だち いやさう開き直られると、反かへつて云ひ出しにくいがね。

つまり何さ。——この頃西さいかく鶴が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知つて……、

世之助 おい、おい、まさか意見をする気ぢやあるまいね。

友だち 大丈夫、叔父さんがまだ若すぎる。——そこで、六十歳の今こんにち日まで、三千七百四十二人の女に戯れ……

世之助 こいつはちと手きびしいな。

友だち まあさ、三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少せうじん人もてあそを弄んだと云ふ事だが、あれは君、ほんたうかい。

世之助 ほんたうだよ。ほんたうだが、精せいぜい々てやはらお手てやはら柔かに願ひ

たいな。

友だち　それが、どうも私には少し真まにうけられないんだね。いくら何だつて君、三千七百四十二人は多すぎるよ。

世之助　成程ね。

友だち　いくら君を尊敬した上でもだよ。

世之助　ぢや勝手に割引して置くさ。——太夫たいふが笑つてゐるぜ。友だち　いくら太夫が笑つてゐても、この儘ままにはすまされない。

白状すればよし、さもなければ、——

世之助　盛りつぶすか。そいつは御免かうむを蒙らう。何もそんなにむづかしい事ぢやない。唯、私の算盤そろばんが、君のと少しちがつてゐるだけなんだ。

友だち ははあ、すると一ひとけた桁狂つたと云ふ次第かい。

世之助 いいえ。

友だち ぢや——おい、どつちがぢれつたい男だつて。

世之助 だが君も亦、つまらない事を気にしたもんだ。

友だち 気にするつて訳ぢやないが、私だつて男だらうぢやないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがらない。

世之助 困つた男だな。それならお名残りに一つ、私の算盤のと
り方を話さうか。——おい、加賀節はしばらく見合せだ。その祐すけ
けよし善の絵のある扇をこつちへよこしてくれ。それから、誰からふそ蠟ろうそ
くしん燭の心を切つて貰ひたいな。

友だち いやに大袈裟おほげさだぜ——かう静になつて見ると、何だか桜

もさむいやうだ。

世之助　ぢや、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願ひたい。

中

もう彼かれ是これ三十年ばかり昔の事だ。私が始めて、江戸へ下つた時に、たしか吉原のかへりだつたと思ふが、太鼓を二人ばかりつれて、角田川すみだがはの渡しを渡つた事がある。どこの渡しだつたか、それも今では覚えてゐない。どこへ行くつもりだつたか、それももう忘れてしまった。が、その時の容子ようすだけは、かう云ふ中うちにも、

おぼろ
朧げながら眼の前へ浮んで来る。……

何でも花曇りの午ひるすぎで、川すぢ一带、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だつた。水も生ぬるさうに光つてゐれば、向う河岸がしの家並やなみも、うつらうつら夢を見てゐるやうに思はれる。後うしろをふり返ると、土手の松にまじつて、半開の桜が、べつたり泥どろゑ絵具のぐをなすつてゐた。その又やけに白いのが、何時いつになく重く
るしい。その上少し時候はづれの暖さで、体さへ動かせば、すぐ
じつとりと汗がにじむ。勿論さう云ふ陽気だから、水の上にも、
吐息といき程の風さへない。

乗合は三人で、一人は国姓爺こくせんやの人形芝居からぬけ出して来た
やうな、耳の垢あか取り、一人は廿七八の、眉をおとした町家ちやうかの女

房、もう一人はその伴らしい、涙をたらした丁稚だつた。それが互に膝をつき合せて凡まん中どころに蹲つたが、何分舟が小さいので、窮屈な事夥しい。そこへ又人が多すぎたせゐるか、ともすれば、舷が水にひたりさうになる。が、船頭は一向平気なもので、無愛想な老爺の、竹の子笠をかぶつたのが、器用に右左へ棹を使ふ。おまけにその棹の雫が、時々乗合の袖にかかるが、船頭はこれにも頓着する容子が無い。——いや、平気なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝字は耳の垢とりで、怪しげな唐装束に鳥の羽毛のついた帽子をかぶりながら、言上げの幟を肩に、獅子ヶ城の櫓へ上つたと云ふ形で、舳の先へ陣どつたのが、船の出た時から、つけ髯をしいては、しきりに鼻唄をうたつてゐる。眉

のうすい、うけ唇くちの、高慢な顔を、仔細らしくしやくりながら、「さん谷や土手下にぬしのない子がすててんある」と、そそのるのだから、これには私ばかりか、太鼓たちも聊いささかたじろいだらしい。

「唐人の『すててん節』は、はじめででげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情ない声を出して、かう云つた。すると、それが聞えたのだらう。私と向ひあつてゐた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐその眼を私にかへして、鉄漿かねをつけた歯を見せながら、愛想よく微笑した。黒い、つやつやした歯が、ちらりと唇を洩れたかと思ふと、右の頬にあさくあさくぼ齧あが出来る。唇には紅がぬつてあるらしい。——それを見ると、私は妙にへどもどして、悪い事でも見つけられた時のやうな、一種

の羞恥しうちに襲はれてしまった。

が、かう云つたばかりでは、唐突すぎる。曰いはくは、この舟へ乗つたそもそもからあつたのだから。——と云ふのは、最初、土手を下りて、あぶなつかしい杭くひを力に、やつと舟へ乗つたと思ふと、足のふみどころが悪かつたので、舷ふなべりが水をあほると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、伽羅きやらの油のほひが、ぷんと私の鼻を打つた。舟の中に、女がある——その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知つてゐた。が、唯女があると云ふだけで、（廓くるわのかへりではあるし）それが格別痛切にさう思つてゐた訳でも何でもない。だから、伽羅の油のほひを嗅かぐと、私は、まづ意外な感じがした。さうしてその意外の感じの後あとには、

すぐに一種の刺戟を感じた。

唯にほひだからと云つても、決して馬鹿にしたものではない。

少くとも私にとつては、大抵な事が妙に嗅覚と關係を持つてゐる。早い話が子供の時の心もちだ。手習てならひに行くと、よくいたづらつ

子にいちめられる。それも、師匠に云ひつけければ、後の崇あとたたりが恐ろ

しい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命に又、草紙さうしをよごしに

行く。さう云ふ時のさびしい、たよりのない心もちは、成人おとなにな

るにつれて、忘れてしまふ。或は思ひ出さうとしても、容易に思

ひ出し悪いにく。それが腐つた灰墨はひずみのほひを嗅ぐかと、何時でも私

には、そんな心もちがかへつて来る。さうして、子供の時の喜び

と悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれぬ。——が、これは

余事だ。私は唯、伽羅の油のほひが、急にこの女房の方へ、私の注意を持つて行つた事さへ話せばよい。

さて、気がついて、相手を見ると、黒羽二重くろはぶたへの小袖すそとりに裾取すそとりの

紅もみうらをやさしく出した、小肥こぶとりな女だつた。が、唐織からおり寄縞よせじま

の帯を前でむすんだ所と云ひ、投島田なげしまだに平元結ひらもとゆひをかけて対つゐの

さし櫛ぐしをした所と云ひ、素人しろうととは思はれない位な、なまめかし

さだ。顔はあの西鶴さいかくの、「当世の顔はすこしまろく、色はうす

はな桜にて」と云ふやつだが、「面道具おもてだうぐの四つ不足よなく揃ひて」

はちと覚束おぼつかない。白粉おしろいにかくれてはあるが、雀斑そばかすも少々あ

る。口もとや鼻つきも、稍下品ややだつた。が、幸生さいはなえぎ際はがいいので、

さう云ふ難も、大して目に立たない。——私はまだ残つてゐた昨ゆ

夜の酔が、急にさめたやうな心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時に又、曰くがある。

曰くといふのは、私の膝が、先方の膝にさはつたのだ。私は卵色縮緬ちりめんの小袖を着てゐる。下は多分肌着に、隠し緋無垢ひむくだつたらう。それでも、私には、向ふの膝がわかつた。着物を着た膝ではない。体の膝がわかつたのだ。柔な円やはらかみの上に、かすかなくぼみが、うすく膚膩あぶらをためてゐる——その膝がわかつたのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に気のない冗談を云ひながら、何かを待設けるやうな心もちで、ぢつと身動きもしないでゐた。勿論その間も、伽羅の油のほひと、京おしろいのにほひとは、絶えず私の鼻を襲つて来る。そこへ、少したつ中には、

今度は向ふの体温が、こちらの膝へ伝はつて来た。それを感じた時のむづ痒いがゆやうな一種の戦慄せんりつは、到底形容する語ことばがない。私は唯、それを私自身の動作に翻譯する事が出来るだけだ。——私は、眼を軽くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察して貰ふより外はない。

が、さう云ふ感覺的な心もちは、すぐにもう少し智的な欲望をよび起した。先方も私と同じ心もちであるだらうか。同じ感覺的な快さを感じてゐるだらうか。——それはかう云ふ疑問だつた。そこで私は、顔をあげて、わざと、平氣を装ひながら、ちつと向ふの顔を見た。が、そのつけやきばの平氣は、すぐに裏切られるやうな運命を持つてゐた。何故かと云ふと、相手の女房は、その

稍汗ややばんだ、顔の筋肉のゆるみ方と、吸ふものをさがしてゐるやうな、かすかな唇のふるへ方とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、さうして、その上に、私自身の心もちを知つてゐて、その知つてゐる事に、或満足を感じてゐる事さへも、わからせてくれたから——私は聊いささか恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人の『すててん節』は始はじめてでげす。」

太鼓がかう云つたのは、丁度その時だつた。耳の垢とりの鼻唄を笑つた女房と、私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、当時、女房に対して感じた羞恥のやうな気がしてゐたが、後あとになつて考へて見ると、実は女

房以外の人間に対して感じた羞恥だった。いや、さう云つては、まだ語弊がある。人間がさう云ふ場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に対して感じる羞恥だった。これは当時の私
が、さう云ふ羞恥を感じながら、女房に対しては、次第により大胆になれたのも、わかりはしないだらうか。

私は全身のあらゆる感覚を出来る丈鋭くしながら、香を品するかうひん人のやうな態度で、相手の女房を「鑑賞した。」これは私が殆すほとんどべての女に対してする事だから、大方君にも以前に話した事があるだらう。——私は稍汗ばんだ女の顔の皮膚と、その皮膚の放散するにほひとを味つた。あぢはそれから、感覚と感情との微妙な交錯かうさくに反応する、みづみづしい眼の使ひを味つた。それから、血色の

いい頬の上で、かすかに動いてゐる睫毛まつげの影を味つた。それから、膝へのせた手の、うるほひのある、しなやかな、指のくみ方を味つた。それから、膝と腰とにわたる、むつちりした、弾力のある、ゆたかな肉づきを味つた。それから——かう話して行けば、際限がないから、やめにするが、兎に角私はその女房の体を、あらゆる点から味つた。敢て、あらゆる点と云つても、差支へはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きの補つた。或は、その上に又、推理の裏打さへも施した。私の視覚、聴覚、嗅覚、触覚、温覚、圧覚、——どれ一つとして、この女房が満足させてくれなかつたものはない。いや実に、それ以上のものにさへ満足を与へてくれた。……………

.....
.....
.....

「忘れものをおしでないよ。」

それから、かう云ふ声を聞いた。さうしてそれと同時に、今まで見えなかつた、女の細い喉が見えた。その蓮葉^{はすは}な、鼻にかかつた声と、白粉の少しむらになつた、肉のうすい喉とが、私に幾分の刺戟を与へるのは云ふまでもない。が、それよりも寧^{むしろ}、私を動かしたのは、丁稚^{でっぢ}の方へふりむいた時の動作が、私の膝へ伝へてくれる、相手の膝の動き方であつた。私は前に、向ふの膝がわかつたと云つた。が、今はそれだけではない。向ふの膝のすべてが

——それをつくつてゐる筋肉と関節とが、九年母くねんぼの実と核たねとを舌の先にさぐるやうに、一つ一つ私には感じられた。黒羽二重の小袖は、私にとつてないにひとしかつたと云つても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後のいは日くを知つたなら、君も認めない訳には行かないだらう。

やがて、舟はさんぼし棧橋についた。舳みよしがとんと杭くひにあたると、耳の垢とりは、一番に向ふへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあほりを食つたやうに装つて、（乗る時にも、さうだつたので、これは至極自然に見えるだらうと思つてゐた。）よろけながら、手ふなべりを舷の上にある女房の手にかけた。さうして、太鼓に腰を支へられながら「これは失礼」と声をかけた。君はその時、私がどん

な心もちだつたと思ふ？ 私は、この接触から来る可也かなり強い刺戟を予想してゐた。恐らく私の今までの経験は、最後の仕上げを受ける事だらうとさへも思つてゐた。が、この予想は見事に、外れはづてしまつたのではないか。私は勿論、滑なめらかな、寧むしろつめたい皮膚の手ざはりと、柔かい、しかも力のある筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの経験の反復にすぎない。同じ刺戟は、回数と共に力を減じて来る。ましてこの時は予想が大きい。私は索漠とした心もちで、静に私の手をはなさなければならなかつた。もし私の今までの経験が、完全にこの女房の体を鑑賞したのになかつたなら、かう云ふ失望はどうして、説明する事が出来るだらう。私はこの女を、感覺的に知りつくした。——どうしても、か

う考へるより外はない。

これは、またかう云ふ事から考へて見ても、わかるだらう。それは私が昨日きのふなじんだ吉原の太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。成程一人は一夜中いちやぢゆう一しよに語りあかした。一人は僅わづかの時間だけ、一つ舟に乗つてゐたのに過ぎないが、その差別は、膚ふか下一寸いつせんでなくなつてしまふ。どちらが私に、より多く満足を与へたか、それは殆どわからない。従つて、私が持つて居る愛惜も（もしさう云ふものがあるとすれば）全く同じやうなものである。私は右の耳に江戸清搔えどすがきの音ねを聞き、左の耳に角田川すみだがはの水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが両方とも、同じ調子を出してゐるやうな心もちがした。

これは、私には兎も角も発見だつた。が、総じて、発見位、人間をさみしくするものはない。私は花曇りの下を、丁稚を伴ともにつれて、その眉のあとの青い女房が、「ぬきあし中なかびねりのあるきかた」で、耳の垢とりの後うしろから、棧橋を渡るのを見た時には、何とも云へずさびしかつた。勿論惚れた訳でも何でもない。唯向うでも大体私と同じやうな心もちであたと云ふ事は、私のさはつた手を動かさずにゐたのでも、わかるだらう。……

なに吉原の太夫？　太夫はまるでそれと反対な、小さい、人形のやうな、女だつた。

下

世之助 まづぎつと、こんなものだつた。そこで、それ以来、その女のやうなものを関係した中へ勘定したから、合せて男女なんによ四千四百六十七人に戯れた事になると云ふ次第さ。

友だち 成程、さう聞けば尤もらしい。だが……

世之助 だが、何だい。

友だち だが、物騒ぶつさうな話ぢやないか。さうなると、女房や娘はうつかり外へも出されない訳だからね。

世之助 物騒でも、それがほんたうなのだから、仕方がない。

友だち して見ると、今にお上から、男女なんによ同席御法度おふれの御布令

でも出かねなからう。

世之助 この頃のやうぢや、その中に出るかも知れないね。が、
出る時分には、私はもう女護ヶ島にょごしまへ行つてゐる。

友だち うらやま羨せるぜ。

世之助 なに女護ヶ島へ行つたつて、ここにゐたつて、大してか
はりはしない。

友だち 今の算盤そろばんのとり方にすれば、さうだらう。

世之助 どうせ何でも泡沫夢幻はうまつむげんだからね。さあ改めて、加賀節
でも承らう。

(大正六年四月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

初出：「新小説」

1918（大正7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyaana

校正：柳沢成雄

1998年10月11日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世之助の話

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>